

ジェンダー間コミュニケーションに関する一考察

—異文化コミュニケーションの観点から—

伊藤 明美

I はじめに

ジェンダーは変化を伴うプロセスとしての文化および社会を構成する人々によるコミュニケーションの申し子である。人は所属する文化や社会の中で、己が従うべき「女性」あるいは「男性」としての規範や価値観を創出する。それらはコミュニケーションを通じて変化しながらも維持され、同時にそれぞれのジェンダー集団に特有のコミュニケーション文化を形成していくのである。ジェンダー間コミュニケーションが序々にその形を変えているように見える一方、所属する国家社会における文化規範の影響を受けつつ強固で変わらぬ特徴をも維持し続けているのは、このような理由によるものであろう。特に、外見に現れる変化は必ずしも人々の古典的ジェンダー観や不平等な男女関係を是正するに値するだけの意識変化を伴うものではないといえることができる。すなわち、現代の男女には極めて自然なこととして受け入れられている女性の言語的男性化や、パンツスーツなど服飾における男性化、あるいは脱毛や美顔を含む男性の女性化といった変化は極めて表層的かつ状況限定的と思われるのである。たとえば、1997年に行われた「男女共同参画社会に関する世論調査」⁽¹⁾では、「男性は家庭よりも仕事を優先する方が望ましい」あるいは「女性が仕事を持つのは良いが、家事・育児はきちんとすべきである」と考える者がそれぞれ6割と8割を超え、日本人の深層意識に潜む根強い役割分業観を示している。本来、意識の変化は社会規範の変化より遅く、ときには個人の行動上の変化より遅い⁽²⁾という側面は見のがすことができない。

旧来のジェンダー観が現代を生きる多くの人々によって強固に維持され、それが男性集団のみならず、女性集団にも共有されるという事実は何を語

り、また男女はその理由をどこに求め、どのように対処すべきなのだろうか。本稿では、文化および社会の強い影響のもとに受肉化され、維持されるジェンダーを文化の一形態と捉え、それぞれの集団構成員によるコミュニケーションを異文化間のものと位置付けた上で、その様相と維持に関わるいくつかの要因について考察を加えるものである。異なるジェンダーに所属する男女はどのようなプロセスを経て集団固有の価値観を形成し、日常生活におけるそれぞれのコミュニケーションへと反映させているのかを示すことで、男女のより深い相互理解への道筋を探りたいと思う。なお、本稿における「コミュニケーション（行動）」とは、ジェンダー集団内部に存在するそれぞれの文化的志向性に基づいて行われる言語を含む「行動様式一般」を指し、言語および非言語によるメッセージ交換のありようを包括的に扱うものであることをあらかじめことわっておきたい。

Ⅱ 異文化集団としてのジェンダー

文化的自己を認識したり表出することは極めて状況依存的で複雑な現象ではあるが、人は生活の中で直面するさまざまな場面において事実上、自らを他者とは異なる文化集団に属する個人として認識することが少なくない。たとえば、文化的差異が顕在化する国際的場面では、人は良くも悪くも所属文化に強い影響を受けていることを敏感に感知する。また、同一の国家社会に暮らし、主流文化を共有するコミュニケーター同士であっても、その対話場面が多様な職業人によって構成されているような状況では、それぞれの職域によって形成された一定の価値観を意識させられることがあるだろう。

前者はドイツ人と日本人、あるいは中国人とメキシコ人など、対話するコミュニケーターが、異なる国家社会におけるそれぞれの主流文化集団の一員としてコミュニケーションをおこなう場合であり、後者は国家社会における文化的下位集団の一員が、主流文化集団の構成員（あるいは異なる下位集団）と行うコミュニケーションである。これらは両者ともに異文化

コミュニケーションとされているが⁽³⁾、文化的下位集団は主流文化の多くの側面をも内化していることから、後者のコミュニケーションが異文化コミュニケーションであるという認識はもたれにくく、一般に日常生活の中では軽視されやすい傾向があることも指摘しておかなくてはならないだろう。告発され続ける女性差別、障害者に対する健常者の無理解、社会に対する高齢者の無力感、子供たちのいじめなど、多くの場合社会問題と認識されるいくつかの現象は、同一国家集団に存在する文化的下位集団の異なる意識、価値観を示していると同時に、彼（女）らとのコミュニケーションが異文化間のものであることへの一般的な認識の甘さが問題を長引かせていると考えられる。コミュニケーターが自他の所属する文化集団に対して無意識、無関心であればあるほど、異文化コミュニケーションは困難であるといえよう。

国家社会の主流文化集団と文化的下位集団の構成員によるコミュニケーションは、より具体的に intra-cultural communication と呼ばれ、シタラムとコグデル⁽⁴⁾、およびバード⁽⁵⁾などの研究者によってその定義づけが行われている。それらをごくおおまかにまとめると、同じ地理、政治システムおよび社会的権力層の形成する主流文化を一定の割合で共有しつつも、対話者の一方あるいは両方が、主流文化とは異なる価値観を所有している集団の構成員でもあった場合に生起するコミュニケーションである。文化的下位集団を特徴づけるものとしては、主に人種、民族、宗教、性的志向、年齢、能力、そしてジェンダーがあげられ、これら集団の価値観は時として主流文化のものとは明らかに異なるため、それぞれを一般に文化集団と呼ぶことができるのだという。加えて、ジェンダーを2つの文化的集団と考えることについてホフステード⁽⁶⁾は、以下のように述べる。

性差を文化に結びつけて語ることはあまりない。しかし、それは語られてしかるべきである。どの社会にも男性の文化と女性の文化があり、両者が互いに異なっていることを認めれば、なぜ伝統的に根強い性別役割を変えることがこれほどむ

ずかしいかを説明することができるであろう。・・・異性の行動に対して持つ感情や恐れは、異文化に接した時の反応と同じくらい頑強なものである。(p.17)

多くの場合、人は「異なる集団」に対して一定の不安を覚えるものだ。男性ばかりの集まりに女性が一人で参加すること（あるいはその逆）に対して、多くの女性（あるいは男性）が少なくとも「居心地の悪さ」、場合によってはホフステードが述べたような「恐怖」ともいえる感情を抱くのは自然である。これは生物学的性差を理由とした感情の生起ではなく、むしろ異なるジェンダーが異文化集団であるゆえの感情であろう。ジェンダー形成が成人ほど明確でもなく顕在化もしない初期の幼児世界では、一方の性による数的な圧倒が他方に不安感をもたらすものではないし、また、双方のコミュニケーション行動に何ら制限を加えるものでもないからである。男女はその生育過程において、ジェンダーを反映する社会とのコミュニケーションを通じて、それぞれが異なる意識や価値観を所有する文化集団となっていくのである。

また、自己内部にあるその他の文化的側面同様、ジェンダーは、多くの場合無意識のうちに形成、維持されるため、その制御は極めて困難である。旧来のジェンダー観念に基づいた多くの行動、たとえば、体育会系クラブの男子学生たちがマネージャーとして女子学生を募集すること（あるいは女子学生が積極的に応募すること）も、父親の全面的な育児を期待しないこと（あるいは最小限の手伝いに留めること）も、一般的には男女双方にとって極めて「自然な」コミュニケーション行動であることは否定できず、こうした己の「自然な」コミュニケーションに対して何らかの挑戦を受けるようなことがある場合は、男女の中に戸惑いや、自己防衛のための他者批判などが生じることになる。なぜなら、所属するジェンダー文化の志向性に対して「不自然さ」を感じることは、自己内部に不安定さを招き入れることにつながるのであり、また、それは強固な自己アイデンティティの一側面との激しい葛藤を意味するからである。

ことばを変えれば、男女はそれぞれのジェンダー集団に所属し、その文化を体現してみせることがあたかも必然であるかのように理解する傾向があり、また、そこに一定の誇りと喜びを見い出しているといえよう。それは社会的少数派とされる女性集団とて例外ではない。なぜならジェンダーが制御困難であるという事実は、集団からの容易な離脱も許されないということにもつながるからである。一般に我々が任意に所属する学校、サークル、地域の集団などにはそれぞれに誇りを持てる肯定的側面と否定せざるを得ない側面の双方が備わっているだろうが、自らが所属する集団に対して否定的な感情が高くなった場合、人は可能であればその集団からの離脱を試みる。しかし、離脱が困難な集団であった場合はどうであろう。一般に人はその事実を受け止め、精神的安定を得るために、己が所属する集団の肯定的側面に着目し、時にはより否定的な側面を持つ他集団（あるいは社会的により劣位におかれた集団）との比較の中で自尊心を保つのではないのか。ジェンダーは歴史、社会、そして文化の生成物であり血縁関係のように生得的で固定化されたものではないが、極めて強固な自己の一側面である。したがって所属するジェンダー集団に対する男女の「誇り」、あるいは「喜び」ともいえる感情など、自らのジェンダーに対する肯定的理解は、離脱が困難であるというこの集団の特徴によってなおさら積極性を帯びていくのではないかと考えられる。

社会・文化的少数派としての女性ジェンダー集団にとって、肯定的理解の対象となる自らの文化的価値は、男性による歴史的な差別をその源泉としているものも多いが、女性はその矛盾に気づいていようがまいが、また、直感的にしる戦略的にしる、集団としての一般的イメージである「やさしさ」、「平和」、「環境」、「福祉」などへの高い感性に対して肯定的感情を持っているように見える。たとえば、女性の政治参加が活発になりつつある昨今、立候補者が強調する政策には「女性の視点」を取り入れる傾向が顕著に見られるが、その柱となるものが上記したイメージであることは周知の事実である。こうして自分自身をジェンダー文化の形成や維持に深

く関与させながら、男女は自らのジェンダー・アイデンティティや自他に関するジェンダー観念を維持し続けていくと思われる。そこで以下では、ジェンダー・アイデンティティ確立のプロセスとその維持および偏見とステレオタイプについて検討し、それらとジェンダー間コミュニケーションのとの関係性について論じたい。なぜなら、これらは我々の無意識と深く関連すると共に形成後の修正が困難で、多くの場合、生涯を通じて人のコミュニケーション行動に影響を及ぼす可能性が高いと考えられるからである。

Ⅲ ジェンダー・アイデンティティの確立と維持

マネーとタッカー⁽⁷⁾は、「ジェンダーは個のアイデンティティの支柱であり、考えること、感じること、行うこと、そして言うことのすべてに、おおいに影響している」と述べているが、それはジェンダー形成のプロセスが人のごく幼いころに端を発し、しかも一生を通じて維持されていくからであろう。人が社会的動物である限り他者との相互交渉は必然であり、日常的な暮らしの中に精神的安定を望むことは自然な感情の流れであるゆえに、所属文化の中で「承認を受けた性」（ジェンダー）は意識するしないうに問わず我々の生き方に影響を与え、男女のコミュニケーション行動を規制していると思われる。

チヨドロウとディナースタインの理論を援用しつつジェンダー・アイデンティティ確立のプロセスと夫婦の関係について論じたルービン⁽⁸⁾は、一般に子どもの最初の育児者が女性（母）であるという事実により、女性は他者に対する高い共感能力を、また、男性はより明確な自我領域を発達させると考えた。すなわち、母親から分離するプロセスの中で中心となるのはジェンダー・アイデンティティと自我領域の明確な自覚であるが、女兒の場合はジェンダーを同一とする母との緊密な関係の中で、共感能力の原点となる「自己と他者を一体化させる」経験をし、まさにこの経験こそが生活における基本的課題—他者との緊密な関係を維持すること—を女性に提供するのだという。

他者感情を受け止め、そこに自らを投入させながら対人関係に親密性を求める傾向は、女性のコミュニケーション行動のいたるところにあらわれているように見受けられる。たとえばウッド⁽⁹⁾は、「女の子がより親密性が高まるだろう少人数での遊びを好み、その中では話し合いを通じた流動的な役割分担をし、勝者も敗者も作らない」傾向を指摘し、その遊び方において男の子とは極めて異なるコミュニケーションを行っている述べている。また、佐々木⁽¹⁰⁾は10代の中絶希望者らをカウンセリングする中から、女性が避妊を申し出ることを躊躇する理由として、「相手に嫌われたくない」、「(相手が) かわいそう」などがあげられることを報告している。中絶という不幸な結果を招きかねない理由ではあるものの、これは相手の感情を取り込むことによって親密な関係の維持を図ろうとする女性のコミュニケーション特徴の一つであると思われる。このような他者感情への配慮と共感、女性の行うコミュニケーションの中に日常的に現れ、無意識の内に共感能力ともいべき対人関係のスキルを強化、維持させていくものと思われる。加えてそれは母親となる女性の場合、「乳児を持つ母親が一時的母親的没頭という体験を通し、自己を乳児の中に感じとり、いわば自己を乳児の中に失うような心理状態を経験する」⁽¹¹⁾ ことによってさらに強化されていくのではないだろうか。

一方、男児のジェンダー・アイデンティティおよび自我領域の確立は、一体化していた母親が異性であることによって、複雑で難しい課題となりその内面に混乱をおこすとされる。ルービン⁽¹²⁾は以下のように述べる。

母に対する愛着、一体感は第一義的なものである。いま、自分を男性であると自覚するために彼は母親とのきずなを放棄しなくてはならない。自己の心的世界に内化した自分以外の最初の人、自分自身の一部と思えるほどに心理の奥深く入り込んでしまった人とのきずなを。・・・それは、大人の男に成長しなければならない男の子にとっては複雑な苦痛に満ちた行程である。・・・従って母親と同一視できないとなると、彼女に対する愛着と矛盾することになる。彼にはまだ彼

女が必要であるが、彼は母親がまだそこにいてくれるか、彼女を信頼できるのか、もう確信が持てないのである。(pp.77~78)

このような乳児期の内面世界の急激な変化によってもたらされた苦痛から自分自身を守るために築き上げる「防御の仕組み」、また、そのことで生じる明らかなる自我領域が男性のコミュニケーションを形成する背景の一部を織り成すのである。明確な自我領域は、また、「感情が絡んでくるような人間関係に対処するのは苦手」⁽¹³⁾ となるような経験をさせるため、男性は一般に他者感情に深入りしない、より合理的な人間関係を求め、その目的にしたがってコミュニケーション行動を遂行させるようになる。男の子がより多くの人数で遊ぶことを好んだり、話し合いよりはルールを伴うゲーム遊びが好きであることも⁽¹⁴⁾、ごく幼い頃に経験するジェンダー・アイデンティティの確立過程とそれに伴う心理的苦痛の影響を受けた男性のコミュニケーションの原型を示してくれるといえよう。さらに、男の子の場合は、その思春期における性的発達の中で、再度母との離別を、今度はより明確な意識下で経験する。性の発達によって強烈に促される思春期における男の子の独立への欲求は、離れがたい母との絆を断ち切ることによって満たされていくものと考えられ、ここでもまた彼らの自我領域はより強固なものへと発達していく可能性は高いといわざるをえない。

男女は異性とのコミュニケーションにおいて、日常的に微妙なズレに直面し、その関係が親密度を増し長期的になるほどに「理解のすれ違い」による溝を埋め合わせるための努力が必要であることを、経験的に理解している。一般に親密度の高い異性関係には共通の民族、文化、言語的背景が存在していることを考えれば、溝を埋め合わせるための決定的解決策を持たないことは不思議な現象にも思えるが、見方を変えれば、両者の間に存在する多くの類似性は他者理解を助けるどころか、差異を覆い隠し誤解を深めるきっかけを与えているともいえる。しかしこれまで述べてきたように、ジェンダー間コミュニケーションにおける誤解の少なくとも一部分は、

男女が母親から分離するプロセスの中で中心となるジェンダー・アイデンティティの確立過程が影響していると考えられることを可能にする。異なるプロセスはそれぞれのジェンダー集団内部に異なる価値観や文化的志向性を形成し、それがジェンダー間コミュニケーションを困難なものにする一つの要因となっているのである。

IV 偏見・ステレオタイプとコミュニケーション

上記のようなジェンダー・アイデンティティのプロセスを経て、一般に男女は異なるコミュニケーションを遂行することになるが、その後、それぞれを異質な文化集団に留める大きな要因として偏見とステレオタイプをあげることができる。これらは共に対人関係における建設的なコミュニケーションを阻害するものとして問題視されることは多いが、一方では人が自尊心を保ちつつ社会で生きていく上で一定の肯定的役割をも果たしうするため、現在のところ、それらを低減するための決定的方策は見い出されていない。しかし、ジェンダー間コミュニケーションにおいては、異性に対する偏見やステレオタイプが時に差別的コミュニケーションを導くという観点から重要な検討項目であることは、間違いない。

心理学的に偏見は態度（ある対象に対する好き嫌いの評価を伴う反応傾向）の一つとされ、特定の社会的集団やそのメンバーを主に否定的に評価する心的準備状態であり⁽⁵⁾、また、ステレオタイプは多様性や個性を無視して過度に一般化されたイメージ⁽⁶⁾とされている。したがって、一定の状況や動機が伴えば、それらは差別的なコミュニケーションを導く可能性があることは否定できない。ジェンダー間コミュニケーションにおいても、偏見やステレオタイプの障害は散見され、それらに基づいたコミュニケーションによって女性の社会的立場が相対的に低くおさえられたり、私的領域においては場合によって家庭内暴力などを引き起こす原因ともなりうると考えられる。たとえば、公的領域においてある男性が「女性は『非論理的で感情的』（ステレオタイプ）なので『重要な部署には適当ではない』

(偏見)」などとし、決定権を持つ部署から閉め出しているとすれば、それはステレオタイプと偏見が導き出だした差別的なコミュニケーションの結果であるといえる。

ブリスリン^(m)によれば、偏見には4つの機能があり、それらは①功利的・適応機能、②自己防衛的機能、③価値観表出機能、および④知識としての機能である。ブリスリンの説明に従い、それぞれの機能をジェンダーに照らしてみていくと以下のようなになると思われる。最初にあげられた功利的・適応機能のうち、前者は、自集団から賞賛を得たり否定的扱いを受けることから回避したい場合に生じる機能である。たとえば、不況等により雇用状態が悪化する時、「女性は腰掛け」と考え労働市場から閉め出したり、労働力の調整弁的な役割を強要するようにしむける可能性を持つ偏見には功利的機能があると考えられる。なぜなら、このような偏見を持つことは、雇用における事実上の競争力低下を促し、自らを優位に置くことができる可能性を秘めているからで、そのような考えを持つ人は男性集団によって賞賛されやすいのである。また、適応機能とは、男性集団での行動様式あるいは話しやすい話題などを「最も適当なエチケット」のように考え、結果として女性を自集団から排斥するよう促したり、そのエチケットに従うよう女性に対して心理的圧力をかけていくような可能性を持つ偏見の機能である。多くの社会で一般に男性のコミュニケーションスタイルが「正当」あるいは「標準的」なものとされる場合が多いのは、社会的権力を持つ男性というジェンダー集団の偏見がその背後に存在すると思われる。

第二の自己防衛機能は、人が自らの不快な現実を認めたくない時に抱く偏見の働きである。たとえば、同期に入社した二人の男女で女性が先に昇格したような場合を考えてみよう。もし男性が女性の昇格について「性を武器に男性上司に取り入ったから」などとし、彼女自身の能力に昇格理由を帰属させなかったとすれば、この偏見は自己防衛機能の役割を果たしているといえる。そのように考えることで自分自身の能力を肯定的にとらえることを可能とし、自尊心が守られるからである。

さらに、第三の価値観表出機能とは、人が高い評価を置く特定の価値を表出するために抱く偏見であり、多くの場合、宗教、政治、社会、美意識などに関する価値観を含むものとされている。たとえば、社会のリーダーシップを男性がとることを「自然の法則」あるいは「神の思し召し」と強く信じる人が、身近に存在する女性の指導者を徹底的にけなしたり糾弾することがあるのは、自己の政治あるいは社会の在り方に関する価値観をより高く評価したいといった思いのために行われるのである。

また、最後の知識として機能する偏見とは、雑多で複雑きわまりない情報や文化を自分にとって意味あるようにカテゴリー化することにおいて生じる否定的態度である。人は生活上で直面する膨大な情報の一つ一つについてその詳細をバラバラに記憶することができない。したがって、カテゴリー化は人が生きていく上での必然であるといえるが、問題はこういったカテゴリー化のプロセスにおいて人は時に、特定の集団に対して否定的なラベル付けを行い、それらに基づいてコミュニケーションを行っているということである。ここでいうカテゴリー化は一般にステレオタイプと密接な関わりを持ち、特に他集団に対する否定的なステレオタイプは偏見の知識としての機能を果たしているといえる。女性に対して否定的ステレオタイプを持つ男性は、多くの場合、女性労働者との事実上の接触を持つ以前に、「知識」という偏見の機能によって女性の雇用や昇格について考える時間を、日常生活におけるその他の仕事に割り当てて効率化を図る可能性があるからである。

潮村⁽⁸⁾によれば、ジェンダー・ステレオタイプとは「性別属性に基づいて形成された単純化したイメージ・観念であり、一般的に固定的な認識枠組みとなる傾向があることに加え、他のステレオタイプ同様に多くの場合、男女を問わず社会集団の成員間に一定程度までは共有されている性質を有し、特別に意識することなく自動的に生起している」とされる。したがって、「男とは・・・」あるいは「女とは・・・」のステレオタイプは、一部の特別な集団による一過性のものではなく、むしろより大衆的で長期的、

かつ固定化された思いによるものであって、それは無意識のうちに生起するものであるということがいえる。加えてステレオタイプは、人の情報処理を一定方向に導く社会的スキーマとして機能する側面と感情や行動を方向づける規範として機能する側面とがある⁽¹⁹⁾ゆえに、我々のコミュニケーションに多大な影響を与えていると思われる。ステレオタイプが社会的スキーマとして機能する時、人はステレオタイプに合致した事象に注目するため、対象となる集団に対しては、無意識にステレオタイプに従った印象を持つようになる。たとえば、一度「女は感情的」といったステレオタイプを持つと、女性の感情的なところに注目しやすくなり（人前で泣くなど）、感情的ではないところ（怒りをおさえて理論的に説明をするなど）は見のがされるようになる。神経症の一つであるヒステリーが女性特有のものとして扱われてきた事実も、上記のようなステレオタイプが人の社会的スキーマとして自動活性化してきた結果生じた女性への否定的印象であるといえよう。逆に家事や育児に積極的な男性の場合も、家庭におけるそのような行為が他者とのコミュニケーションでは見過ごされたり、あるいは過度に特別視されるといった現象が見受けられるのは、人々の持つ男性一般に対する「男は仕事、女は家庭」などのステレオタイプが影響していると考えることが可能である。

ステレオタイプはまた、人の感情や行動を方向づける機能を持つと考えられている。たとえば、女性の身体は性的に魅力的である方がよい（e.g. 体型がスリム、胸が大きい）と考える傾向が強い女性ほど、また、女性の身体に繊細な美しさ（e.g. 肌が白く、指が細いこと）を求める女性ほど、自己の身体への満足度が低く、変身願望が強くなるといったことが検証されている⁽²⁰⁾。さらに、若い女子学生の中には、「男子が家庭科を履修するのはおかしい」という感情を持つ者もあるが⁽²¹⁾、こういった感情が生起する背後にもまた性別役割分業観に関するステレオタイプが存在していると考えられるのである。人のコミュニケーションは感情だけに支配されるわけではないが、一方では感情を全く無視することも不可能である。時には

知性が感情を乗り越え、性別役割分業に則ったコミュニケーション行動を拒否することもあるだろうが、上記のような「男子が家庭科を履修するのはおかしい」という感情を抱く男女が、旧来の性別役割分業を踏襲したライフスタイルを選択するようになる可能性は否定できないと思われる。日本では、いまだ家事・育児は男性にとって「手伝う」仕事であり、同時に女性にとっても「手伝ってもらう」タイプのものであるとして考えられていることは否めない。共働き夫婦であっても家事・育児分担の多くが事実上、女性の手によって担われているという現象⁽²²⁾、あるいは、諸外国と比較して依然顕著なM字型曲線は⁽²³⁾、コミュニケーション行動に与える上記のような感情の影響を無視するわけにはいかないだろう。人々の性別役割分業に関わる感情は根強いジェンダーのステレオタイプの影響と考えることが可能である。

このようにステレオタイプはスキーマとして自動活性化しながら人間のコミュニケーションに影響を与えている。それゆえ、否定的なステレオタイプは偏見や差別を導き、特定の集団を社会的に不合理な立場へおいやる可能性を内包するものであるが、このことに関連して否定的なステレオタイプを当てはめられた集団の成員が抱えるスティグマの問題も見のがせない。スティグマは、自分が否定的なステレオタイプに関連づけて判断され扱われるかもしれないという不安を生じさせると共に実際の行動にも影響を及ぼしたり、さらには否定的な経験を偏見や差別によってもたらされたと考えることを回避する傾向を生じさせるため、コミュニケーションの悪循環を引き起こすのである⁽²⁴⁾。すなわち、「女は感情的」などの否定的ステレオタイプは、女性を感情的にふるまわせるための動機づけを与え、また、「感情的な女性には責任ある仕事が任せられない」などの偏見によって不当な立場に追いやられたとしても（e.g.希望する役職を得ることができない）、スティグマを持つにいたった女性はその事実に対して客観的な判断ができなくなってしまうということなのである。自分の置かれた不当な状況を偏見や差別のせいではないと考える傾向について、上瀬⁽²⁵⁾は先行

研究をまとめ、以下の5点を理由にあげている。

- ①人は自分が所属する集団の社会的評価を自己評価の源としているため、否定的結果を所属する集団のせいにするのは、その集団が社会的に価値が低いものと認めることになり、抵抗感を感じる。
- ②人は自分が状況を統制していると考えたいものだが、仮に否定的結果を偏見や差別と考えれば、自己評価は守れるがそれによって自分の行為事体には統制力がない、頑張っても差別があるからどうしようもないということ認めることになる。
- ③偏見や差別と考えることは、現在の人間関係を否定的なもの判断することになり、自分が差別的な職場で働いていること、否定的な人に囲まれていることを認めるのは極めて不快である。
- ④人は自尊心を守るため自分以下の人（集団）と比較する傾向がある。
- ⑤否定的結果の価値を低下させて自尊心を守る傾向がある。

人は自尊心なくしてその日常を快適に生きることができない。ジェンダー間に存在するコミュニケーションの障害、それによって引き起こされる差別の長期化やその解消にむけた道筋の困難は、少なくともその理由の一つとして、こういった否定的ステレオタイプの影響を受けた男女双方のコミュニケーション行動における悪循環をあげることができるのではないかと思われる。外界への適応は人が生きていく限りにおいて必要条件である。そのため煩雑で多種多様な外界の情報を整理して理解しようとする欲求は極めて自然であり、また、満たされるべきものであろう。だからこそ人は情報をカテゴリー化するのである。このカテゴリー化によってステレオタイプが生じているとすれば、人はステレオタイプから逃れることなどできないという困難な問題に直面する。しかし、否定的な影響を与える恐れのあるステレオタイプの低減や解消にむけての決定的に有効な道筋は示されていない⁽²⁶⁾といった現状のなかで、人がステレオタイプと共存しながら日常

を生きていかななくてはならないとするなら、少なくともステレオタイプやその形成プロセスに関する正しい理解、自覚的なつき合い方が望まれるのはいうまでもない。

V ジェンダーとコミュニケーション文化

ジェンダー・アイデンティティの確立過程および偏見やステレオタイプの影響を受けつつ男女はそれぞれに異なる文化を形成し、また強化・維持していくことを概観した。文化的に一定のまとまりを持った集団の成員は、共通の価値観や信念を持ち、それらは成員のコミュニケーションに反映されるため、そこには一定の類似性があり、また、コミュニケーションの目的や方法は集団間で異なるといわれている。一例として英語を母語とする社会で広く支持される直線的コミュニケーションと日本を含むアジア言語を母語とする社会に見られる円的コミュニケーションがあるだろう。直線的コミュニケーションとは、その目的あるいは中心的課題を「効果的な説得」に置くため、より直接的な表現と構造に頼るものであり、円的コミュニケーションとは受け手の感情を考慮し、相手との「調和」を目的とするもので、より婉曲な表現と構造を用いるコミュニケーションとされている。

ラボフ⁽²⁷⁾は、特定の集団がそのコミュニケーションにおいてこのような一定の規範ともいべき類似性を共有している場合、それをコミュニケーション文化と定義した。ジェンダーという二つの文化的集団にもそれぞれにコミュニケーション文化は存在すると考えられ、多くの男女はそのコミュニケーションにおいて異なる目的、ルールを用いていると考えられる。すなわち、女性におけるジェンダーの社会化は、関係性、他者への感受性、相互作用のプロセスに重点を置き、男性の場合は自立、権力、結果を重要視することで、男女のコミュニケーションは異なるルールに依存するようになるため、結果として援助、興味、いたわりの示し方が異なる方法で行われ、さらには同じコミュニケーションに対して異なる理解をするようになるのである⁽²⁸⁾。たとえば、筆者のある友人が夫との会話を聞かせてくれ

たことがある。それは、共通の友人が遠方から彼（女）たちの暮らす街に訪ねてきたので地元名産の品々を使った夕食で歓待したところ、後日先方から丁寧な葉書と共にある品物が届いた時の会話であり、以下のようなものであった。

妻：「気をつかってくれたんだね。嬉しいね。」

夫：「いや。よほど楽しかったんだらう。良かった。」

ここで気づかされるのは、妻は先方が自分たちの気持ちに配慮してその品物を送ってくれたと思い、先方の気持ちに対して喜びを感じているが、夫の方は自らの行為に対して先方が喜んだと思っており、相手を喜ばせた自分の行為に対して「良かった」という感情を抱いたということである。先方がとった「お礼の品物を送る」という行為の理由や動機を正確に知る由はなく、また、この夫婦双方の相手に対する解釈はそれぞれが正しいかもしれない。しかし、ここで重要なことは、妻と夫が同じコミュニケーション上の刺激に対して異なる解釈を与えているということである。それぞれの発言は異なる価値観に基づく異なるコミュニケーション文化がもたらした解釈である。すなわち、この妻と夫のコミュニケーションは、前者が相手の感情に、後者は自分の感情に第一義的な意義を見い出しているということである。

ウッド⁽²⁹⁾はジェンダー間におけるコミュニケーションについて、男女それぞれ10項目づつの特徴を挙げているが、それらのなかでも「女性にとって話すことは他者との信頼を築き、それを維持するためだが、男性にとっては自らの考えを主張するためである」、「女性にとっての会話は人々の間の調和や平等を創造するためであるが、男性にとっての会話は地位や権力を構築するためのものである」、「女性は会話の際、相手の話を傾聴していることや気づかいを示すために反応するが、男性の場合の反応は自分の主張や会話における優越性を示すためである」などは、違いが顕著に表わさ

れ興味深い。対人コミュニケーションはかなり無意識的で計画性の低い性質のものであるがゆえに⁽³⁰⁾、一般に男女はコミュニケーションにおけるジェンダー文化の影響を意識することは少ない。男女混合集団における相対的な女性の発言数の少なさ、感情や親和性を示す視線の多さも⁽³¹⁾、極めて無意識のうちに生じる言語及び非言語によるコミュニケーションである場合が多いし、また、男性がそのコミュニケーションにおいて自らのリーダーシップや相手との勝敗を意識するといった傾向も常に意識的であるとはいえない。逆に無意識の内に行われるからこそ、そこに文化の存在を認めることができるのだともいえるが、コミュニケーション上の障害を低減するためには、それぞれの集団が持つ文化的志向性の理解および意識化は、一つの必要条件になると思われる。

VI コミュニケーション文化と権力

コミュニケーション文化の形成およびその維持過程の背景には、社会的な権力の優・劣位性が存在していることは確かであり、ジェンダー間のコミュニケーションにおいては、多くの社会で男性的コミュニケーションが「正当」あるいは「標準」となる傾向がある。多くの場合、ジェンダーが男性中心の権力者集団によって戦略的に解釈されるため、男性的コミュニケーションがより優れたものとして提示され維持されていくためである。コミュニケーション文化と権力、およびそれに伴う抑圧や差別の問題は、とりわけ国家社会の中に存在する intra-cultural communication の領域においては切り離して考えることは不可能であろう。なぜなら、いずれのコミュニケーション文化も排除性を伴う歴史・社会的文脈の影響を受けているからであり、ジェンダーのみならず、経済力、血統など時代や社会背景によってその形は変えつつも、人類が創造してきた文化や社会には差別や抑圧が常に存在していたからである。

しかし、非主流集団は主流集団によって形成され求められるコミュニケーションを自明視しながらも、最も「心地良い」自らのコミュニケーション

文化をも維持し続けていくことも事実であろう。たとえば、前述のような英語社会における直線的コミュニケーションも家庭や学校教育を通じて一般的には「正当」なものとされているが、このコミュニケーションは米国社会においては中流以上の白人男性によって好まれるスタイルであり、女性集団を含む文化的マイノリティのものとは異なるといわれているのである⁽³²⁾。「正当」なるコミュニケーションとは虚構の現実である。正当性への方向付けを行うのは権力であり、また権力関係の中で芽生える他者集団への偏見や否定的ステレオタイプの影響を受けて、そのように理解する人間の意識と態度であると思われる。したがって、たとえば女性のコミュニケーションを「まわりくどく」、「直接性にかげ」、「非論理的」などとして劣勢なものともみなす男女が存在するのは、これまでの圧倒的な男性主導の社会の中で、不当ともいえる権力配分の影響を受けたことによるものであるといえよう。

しかし、ここで注意しなくてはならないのはコミュニケーション文化の差異を権力格差あるいは差別と同次元で語ることの是非である。権力構造の中で劣位に置かれた集団のコミュニケーションにはその背後に被差別性があるとし、その徹底的排除を行うとすれば、あらゆる状況における自らのコミュニケーション否定に導かれていく可能性があると思われる。たとえば、現在では女性の社会進出が進み、多様な就業分野に女性の活躍が見られるようになったが、そういった女性たちに求められているのは男性的価値観に基づいたこれまでの労働形態の踏襲をはじめとする「男性化」である。総合職の設置、保育時間の延長などもその背後には安定した労働条件を得るためには女性は男性化すべきという考え方があるように思える。しかも女性の男性化を促すこのような考え方は多くの男女に承認されており、それに従って働かない女性（場合によって男性も）に対しては「甘えている」、「怠慢」、「ダメだ」などの烙印が押される傾向があることは否定できない。男女のコミュニケーションに対して「正当性」や「非正当性」を見い出したり、一方的にどちらかを肯定あるいは否定することは、はか

らずも女性のコミュニケーション文化を劣位に維持するというパラドクスに陥らせる可能性を示すように思われる。両集団の異なるコミュニケーション文化は権力集団やその配分形態などに関係づけて議論されるべきではあるが、是正すべき異なる権力配分と等位の関係を意味するものではない。むしろ現存する権力格差を是正するためにこそ（あるいは差別解消に向けて）、差異ある両集団のコミュニケーション文化は維持されてしかるべきではないのか。

人の織り成すコミュニケーション文化は相対的に価値あるものと考えたい。いかなるコミュニケーションもそこに何らかの「正当性」が見い出されるとすれば、それは社会におけるパワー・バランスの非対称性を示すのであって、コミュニケーションの非対称性を示すものではない。したがって、ジェンダーのコミュニケーション文化、特に文化的下位集団として位置づけられる女性のコミュニケーションを考える時、その背後にある権力格差の問題や被差別性のみを焦点をあてた論議は不毛である。加えて、人は感情を伴うコミュニケーションを行いつつ「今、ここ」を生きてる。川中⁽³³⁾は述べる。

・・・ほとんどの人は、意識的には男性も女性も平等であるというが、潜在的には男女差という区別意識をぬぐい去るわけにはいかない。・・・すなわち男女の差異を出産、授乳だけに限定して、女も人間であるという平等理念に追い付こうとしても、それは男性的になろうとしているのであって、たとえ男尊女卑ではなくても、女は男と違うというごく自然な感情をフェミニストたちは人々の意識から消し去ることができないのである。(pp.63~66)

異なるジェンダー集団に所属する個々人の対人コミュニケーションにおいて目指すべきものは、現存する差異の解消ではなく、むしろ差異ある個人の相互理解と共に双方が共に社会を形成しつつ十分に生きることができるときのためのスキルとその倫理的枠組みの発見であると思われる。この意味で、

今後のジェンダー間コミュニケーションを考えるにあたっては、双方が真にそれぞれを理解するように努力する態度の形成、つきつめれば意識化されたコミュニケーション・スキルとしての共感能力が極めて重要となることだろう。

Ⅶ 共感的コミュニケーションを求めて

共感という概念は異文化コミュニケーション論では中心概念の一つともいえ、その理解と能力の育成に力をそそがなくてはならないものとされる。それがいかなるものであるのかについては多くの考え方が存在し、同情や思いやりと同義に扱うものから、全く別個に定義づけするものまで様々ある⁽³⁴⁾ことは否めないが、コミュニケーション学者ミルトン・ベネット⁽³⁵⁾は、共感と同情をはっきりと区別する。すなわち、共感的コミュニケーションとは相手の視点や感情を共有した行為であり、同情的コミュニケーションとは自らの視点や経験から相手の感情をおもんばかりの行為とする。

この考え方からすれば、対人コミュニケーションにおいて互いに文化を異とする場合、同情は肯定的なものであれ否定的なものであれ適切なコミュニケーション行動をもたらさないということになる。たとえば、日本国籍を有する筆者のある友人はケニアの男性と結婚した直後に夫に手作り弁当を持たせて口論になったことがあるという。日本人であるこの友人にとって手作り弁当は純粋に愛の表現であるが、夫にとってのそれは職場における社会的地位の低下を意味するのであった。社会的階層がはっきりとしたケニア社会において地位のある人間が昼食を持参することは極めてまれであるという。したがって、この場合の日本人妻がとった行為は自らの経験に基づく同情によるコミュニケーション行為であり、そのために異なる文化を持つ夫とのコミュニケーションにおいてすれ違いを起こしたのである。一方、共感に基づくコミュニケーション行為とは、他者の文化的背景や感情をできる限り正確に理解した上で一時的に自分自身の考え方を保留し、他者の感情世界に自らを投入することで生じる行為であり、異なる文化を

持つ人々が社会生活を送る上での必要なコミュニケーション・スキルということができる。

また、社会的権力を持って一方が他方を「同化(assimilation)」しようとする試みを「適応(adaptation)」と考えるような動きが世界中で見られるが、それは結局のところ相互理解を導くどころか憎悪すら生み出していることは明らかである。同化と適応もまた明確に区別すべき概念である。上記ベネット⁽³⁶⁾によれば、同化とは異文化集団の世界観を自らのものと置き換えるプロセスを指し、適応とは自らのアイデンティティは保持しつつも自己の世界観が拡張されるプロセスを指すものとされる。多くの場合、同化は集団間に権力の格差がある時には起こりやすく、権力のより少ない一方の個人あるいは集団が他方にあるより権力の大きな集団の規範、価値観等を内化させるプロセスである。それは戦略的になされることもあれば、無意識に行われることもある。社会的成功を手中におさめよう（あるいはおさめた）とする女性が社会で優勢とされる男性的価値観を受け入れ、女性の価値観、コミュニケーションスタイルをより程度の低いものとみなしたり、あるいは積極的に無視したりする傾向などは同化と考えることが可能である。一方適応とは異なる文化には異なる価値観、倫理観に伴うまったく違う他者評価がありうることの明確な認識と理解に基づく複数文化によって拡張された自己実現を促すことである。ジェンダーにおける対人コミュニケーションに照らして考えれば、双方の異なるコミュニケーションの肯定的理解、受容がより豊かな自己変容（拡張）をもたらすといえる。両者間に存在するコミュニケーション文化の違いは、決して否定的なものではなく、むしろ両者の関係を競合的なものからより協調的なものへと導く一つの大きな動因となりえるのである。

つまり共感的コミュニケーションとは、差異および類似性に対する高い感性をその出発点として一時的に他者感情を取り込むスキル、および他者理解を伴う自己拡張という適応のプロセスをたどるコミュニケーションであると思われる。また、こうしたコミュニケーションをより発展的にとら

えれば、それは単なるスキルを超えた人間関係における新たな倫理観の形成をもその視野に置くことができる。なぜなら、人間が本質的には他者に責務を負った倫理的な存在であるからであり、他者関係こそが人間の意味関連の根源であり、人間と人間との関係を支える倫理的な構造であるからである⁽³⁷⁾。特に権力格差に基づく抑圧や差別の歴史を伴って形成されるに至ったジェンダーのコミュニケーション文化およびそれを具現化する日常のコミュニケーションは、人間関係における新たな倫理創出を視野に置く共感的コミュニケーションを抜きに建設的な関係を構築するのは難しいのではないかと考える。

VII おわりに

ジェンダー・アイデンティティの確立過程やステレオタイプ、偏見の影響下で、両集団は異なるコミュニケーション文化を形成し、また、維持し続けている。それゆえ異なるジェンダーの対人コミュニケーションにおいては、それぞれのコミュニケーション文化に対する明確な認識や理解が重要であり、また相互理解を促す共感的なコミュニケーションが必要になることを述べた。コミュニケーションは社会的動物としての人間が必然的に抱えている他者への有責性を具現化するための一つの手段でもあることを考えると、共に家庭や社会を形成する男女という異なるジェンダー集団にとって共感に基づいたコミュニケーションは極めて重要であると思われる。男女というジェンダー集団にあるコミュニケーション文化の差異を明確に認識し、相互理解への努力を惜しまず、他者への有責性を自覚しながら、それぞれがコミュニケーションにおける自己拡張をとげて行くとき、ジェンダーはより肯定的で豊かな可能性を我々の生活に与えてくれるのではないかと考える。また、問題視されるべき権力格差の問題もこのような日常的な男女のコミュニケーション変容のプロセスの中でこそ真の意味での平等へとその歩を進めることができるのではないだろうか。

(注)

- (1) 総理府「男女共同参画社会に関する世論調査（平成9年）報告概要」
〈http://www.gender.go.jp/yoron/summary/2_2.html〉 具体的には「男性は家庭よりも仕事を優先する方が望ましい」とする考え方が全体の62.4%、「女性が仕事を持つのは良いが、家事・育児はきちんとすべきである」が86.4%。この他、総理府が行った「少子化に関する世論調査」（2002）では、妻の就労形態に関わらず家事は「妻が行う」が7～8割と極めて高い。
- (2) ビビアン B. ルービン, 賀谷恵美子（訳）『夫／妻この親愛なる他人』垣内出版, 1992. 4. 30, p.14.
- (3) ただし、後者については intra-cultural communication と呼ばれ、権力格差の問題と連動させながらその研究が積み上げられてきている。本稿が検討を試みるジェンダー間コミュニケーションはこれにあたるものである。
- (4) Sitaram, K.S. and Cogdell, R.T. *Foundations of Intercultural Communication*. Columbus, OH: Merrill 1976, p.28.
- (5) Byrd, M.L. *The Intracultural Communication Book*. New York: McGraw-Hill, 1993, p.1.
- (6) ヘールト・ホフステード, 岩井紀子, 岩井八郎（訳）『多文化世界』有斐閣, 1995. 2. 20, p.17.
- (7) ジョン・マネー／パトリシア・タッカー, 朝山新一他（訳）『性の署名』人文書院, 1990. 7. 31, p.13.
- (8) ビビアン B. ルービン 前掲書 pp.80～81.
- (9) Wood, Julia. "Gender, Communication and Culture," In Samovar A., Larry and Porter E. Richard (ed.) 7th ed. *Intercultural communication: A Reader*. Wadsworth Publishing Company A Division of International Thompson Publishing Inc., 1993, P.173.
- (10) 高校生の性に関するの調査（「佐々木静子講演会 女性の視点で医療

- を見直そう」, 日本女医会北海道支部 2001. 9. 30, p.7.)
- (11) 土場学『ポストジェンダーの社会理論』青弓社, 1999. 10. 30, p.76
 - (12) ビビアン B. ルービン 前掲書 pp.77~78.
 - (13) ビビアン B. ルービン 同上書 p.86.
 - (14) Wood, Julia. 前掲論文 p.174.
 - (15) 岡 隆「ステレオタイプ, 偏見, 差別の心理学」『現代のエスプリ』第384号 1999. 7. 1, p.8.
 - (16) 同上論文 p.7.
 - (17) Blislin, Richard W. *Cross-Cultural Encounters: Face to Face Interaction*. New York: Pergamon Press, 1981, pp.42~43.
 - (18) 潮村公弘「性ステレオタイプ—社会心理学的基礎過程とその機能様態」『現代のエスプリ』第384号 1999. 7. 1, pp. 100~101.
 - (19) 池上知子・北野佳穂里「ステレオタイプの規範機能に関する一研究—「女らしさ」「男らしさ」が生み出す身体への不満—」『愛知教育大学研究報告』49 (教育科学編) 2000. 3, p.95.
 - (20) 同上論文 p.101.
 - (21) 札幌学院大学での「異文化コミュニケーション論」講義 (2002年度夏期集中講義, 3, 4年生対象) 提出レポートより.
 - (22) 経済企画庁 (現内閣府, 平成9年)「無償労働の貨幣評価について」によれば, 有職男性の家事時間は平日で8分.
 - (23) 総理府編『平成12年度男女共同参画白書』(p.38)によれば, 女性の労働力率が日本と同様の M 字を描くのは韓国のみ. その他の国々は逆 U 字であるとされた.
 - (24) 上瀬由美子『ステレオタイプの社会心理学』サイセンス社, 2002. 2. 25, pp.87~102.
 - (25) 同上書 pp.105~117.
 - (26) オルポートなどの心理学者によって「接触」がステレオタイプや偏見の低減につながると言われたが, その後の研究では接触も「適切」なも

のでないとかえって偏見が増幅されるなどの傾向が報告されている。

- (27) Labov, William. *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia; University of Pennsylvania Press, 1972, p.121.
- (28) Wood, Julia. 前掲論文 p.175.
- (29) 同上論文 p.174.
- (30) プロッサー・マイケル, 岡部朗一 (訳) 『異文化とコミュニケーション』 東海選書, 1994. 2. 22, 第3刷 p.6.
- (31) 大坊郁夫「非言語コミュニケーション」高木修監修・土田昭司編『対人行動の社会心理学』第4章 北大路書房, 2001. 3. 20, p.47.
- (32) Bennett, Milton J, “Overcoming the Golden Rule: Sympathy and Empathy,” Kochman, Thomas, “Black and White Cultural Styles in Pluralistic Perspective,” In Milton Bennett (ed.) *Basic Concepts of Intercultural Communication*. Yarmouth, Main; Intercultural Press, 1998, p.208, pp. 131~156および Martin, Judith N, “Understanding Whiteness in the United States,” In Larry A. Samovar and Richard E. Porter (ed.) 7th ed. *Intercultural communication: A Reader*. Wadsworth Publishing Company A Division of International Thompson Publishing Company Inc., 1993, pp.47~48 など.
- (33) 川中なほ子・伊藤春樹『女性学のエチカ』南窓社, 2002. 12. 21, pp.63~66.
- (34) 佐藤悦子『家族内コミュニケーション』頸草書房, 1990. 10. 15, 第3刷 p.145) によれば, 共感や同情にという概念に関して数多くの研究が蓄積されてきた心理学の分野においてもそれらの解釈は様々であり, また記述や説明をするのに難しい事柄とされ, 明確な合意はできていないとされている。
- (35) Milton, Bennett J. 前掲書 “Overcoming the Golden Rule: Sympathy and Empathy,” pp.197~207.

(36) Milton, Bennett J. 同上書 “Current Perspectives of Intercultural Communication,” p.28.

(37) 川中なほ子・伊藤春樹 前掲書 PP.183～184.

〈参考文献〉

秋山さと子『母と子の深層』青土社, 1981.

オルポート, G.W., 星野命・原一雄訳『人格と社会との出会い』誠信書房, 1972.

数土直紀『理解できない他者と理解されない自己』頸草書房, 2001.

杉原名穂子・喜多加実代「『男』と『女』の再生産メカニズム」『文化の社会学』藤原書店, 1994.

チョドロウ, ナンシー, 大塚光子・大内菅子訳『母親業の再生産』新曜社, 1996.

西田ひろ子『異文化間コミュニケーション』創元社, 2000.

ホール, エドワード T. 岩田慶治／谷泰 (訳)『文化を超えて』ティービーエス・ブリタニカ, 1993. 2. 8.

宮島喬『文化と不平等 社会学的アプローチ』有斐閣, 1999.

Gillian, Carol. *In a Different Voice*. Harvard University Press, 1998.

Kaplan, Robert B. “Culture Thought Patterns in Inter-Cultural Education,” In *Language Learning* 16, nos. 1 and 2, 1966.

Singer, Marshall R. *Perception & Identity in Intercultural Communication*. Yarmouth, MN; Intercultural Press, 1998.

Tannen, Deborah. *That's Not What I meant!* New York; Ballantine Books, 1986.